書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

教行信証入門講話集

暁烏敏 Akegarasu Haya

書肆心水

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

教行信証入門講話集

目次

教行信証総序講話……7
教行信証教巻講話……117
教行信証行巻講話……205

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

凡例

一、本書は暁烏敏による『教行信証』についての連続講話の記録を収めたものである（四百字詰め原稿用紙換算一五〇〇枚分）。底本には会員頒布版の『暁烏敏全集』（一九七七年、発行者暁烏敏全集刊行会、発行所涼風学舎）を使用した。『暁烏敏全集』においては「教行信証講話」と題して集められているテキストである。「行巻」の途中で終っているが、講話自体がそこで途絶したものである。

一、本書では地の文・引用文ともに新仮名遣いで表記した。

一、踊り字（繰り返し記号）は「々」のみを使用し、それ以外の踊り字は繰り返す文字に戻して表記した。

一、読み仮名ルビは底本のものをすべていかし、さらに附加した。

一、読みにくい場合に送り仮名を加減した。ただし、親鸞の文章については底本の記述のままとした。

一、〔　〕の部分は本書刊行所による註釈である。

一、地の文においては現今一般に漢字表記が避けられる傾向にある左記の語を平仮名に置きかえて表記した。

雖も（いえども）愈々（いよいよ）印度（インド）此所・此処（ここ）悉く（ことごとく）此の（この）是れ・之（これ）併し・而し（しかし）併も・而も（しかも）屢々（しばしば）其処（そこ）其の（その）忽ち（たちまち）猶お（なお）乍ら（ながら）殆ど（ほとんど）儘（まま）稍（やや）

SAMPLE
Shoshi-shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

教行信証入門講話集

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

教行信証総序講話

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

顕浄土真実教行証文類序

愚禿釈親鸞述

窃に以みれば、難思の弘誓は難度の海を度する大船、無礙の光明は無明の闇を破する慧日なり。然れば則ち、浄邦縁熟して、調達闍世をして逆害を興ぜしめ、浄業機彰れて、釈迦韋提をして安養を選ばしめたまえり。斯れ乃ち、権化の仁、斉しく苦悩の群萌を救済し、世雄の悲、正しく逆・謗・闡提を恵まんと欲してなり。故に知んぬ、円融至徳の嘉号は、悪を転じて徳を成す正智、難信金剛の信楽は、疑を除き証を獲しむる真理なり。爾れば、凡小修し易き真教、愚鈍往き易き捷径なり。大聖一代の教、是之徳海に如くは無し。穢を捨て浄を忻い、行に迷い信に惑い、心昏く識寡く、悪重く障多きもの、特に如来の発遣を仰ぎ、必ず最勝の直道に帰して、専ら斯の行に奉え、唯斯の信を崇めよ。噫、弘誓の強縁は多生にも値い叵く、真実の浄信は億劫にも獲叵し。遇行信を獲ば遠く宿縁を慶べ。若し也此の廻疑網に覆蔽せられなば更りて復曠劫を逕歴せん。誠なる哉や、摂取不捨の真言、超世希有の正法、聞思して遅慮すること莫れ。爰に愚禿釈の親鸞、慶ばしき哉や、西蕃・月氏の聖典、東夏・日域の師釈に、遇い難くして今遇うことを得たり。聞き難くして已に聞くことを得たり。真宗の教・行・証を敬信して、特に如来の恩徳の深きことを知んぬ。斯を以て聞く所を慶び、獲る所を嘆ずるなり矣。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

第一講　はじめに

昭和七年の正月を迎えお互いが一年ずつ年を加えました。一年の年を取ってさて反省してみる時、昨年一年どういう事をして来たか、何か自分によいことを戴いたかと、私は自分に算盤をはじいてみます。

物の点でも、有るものが無くなることもあろう、無かったものが有るようになる事もあろう。自分の身体の上でも、年を取ると歯も抜け、目方も減り、力も無くなってゆく。が、その間に何か残ったものはないであろうか……。出来たものは何時か壊れてゆく。会うた者は別れてゆくが、その間に、限りなき命に親しませて貰うことが出来ただろうか。それが出来ればそれだけが儲ものなんです。

私共は常に先徳のみ教えに触れておれば、その限り無き命を今日の日暮しの上に味わい、その命の底に限り無き光明を味わわせて戴くことが出来ます。これが信心と申すものであります。この信心のお味わいに念々触れさせて貰わなければ、我々がこの世に生を受けた意味がないのであります。

昨年の一年を顧みると、ただただ受けた事が多く、受けた御恩をしみじみ思います。不足勝ちの自分に、物の上でも、又智慧の上にも多分にお与えを受け、お育てに預かっておることを喜ぶのであります。

昨年は、日本の神代の精神の研究から、聖徳太子様の御精神を今迄よりも深い底に於いて触れることが出来、従って親鸞聖人の御信心にも今迄より深い所に於いてお味わいさせて貰うことが出来ました。その事は昨年一年の私の儲ものでありました。

この頃読んだ書物に、聖人が関東においでになる際お建てになった御堂の御本尊は、阿弥陀様でも、お釈迦様でも、法然上人でもなく、聖徳太子様であったという事が記されてあります。さもありなん、と今更のように嬉しく思うのであります。

私は十三才の年学校で御和讃の講義を聞いた。それから本年五十六才迄聖人のみ教えを色々の形に於いて受けて居るのであります。色々の人が広く深く聖人のお徳を慕われ、そのお手引で自分に気付かぬ事をだんだん深く新しく気付かして貰える事を喜んでおります。この頃になって、自分に考える許(ばか)りでなく、人の調べた考えを、心をひそめて聞かねばならぬのだなあとしみじみ感じております。

昨年は一月、二月、『古事記』によって日本精神を究めたが、今年は、午前『日本書紀』によって日本精神を究め、又一層聖徳太子の御精神を広く深く研鑽致したいと今日からその仕事にかかっております。

私は書物を自分で読む事が出来んので、皆に聞かして貰うておる。これも不自由のことで、自分で読めたら汽車の中でも船の中でも一寸の暇を盗んで見る事が出来るのだが、自分で読めないから時間を決めて人に読んで貰わねばならない。何か盗み事でもす

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

るようにせねば勉強が出来ない。時間が惜しいもので尋ねて来る方々にも不愛想になって、ゆっくり一人一人にお話出来ないのを残念に思っております。その代りに、自分の勉強した事を御法座の折にお話致したいと思っております。又、自分に供養する心で一層聖人の御心を極めてゆきたいと法座にのぞんでおるのであります。

本年は『教行信証』をぼちぼちお味わいしてゆきたいと思います。『教行信証』は聖人の御著述の中で、最も大部の御書物であります。従来私共が教えを受けたところでは、聖人五十二才の年、常州稲田の草庵で完成されたというように決められております。それを標準にして、東西両本願寺では大正十二年立教開宗七百年記念法要が勤められたのであります。東本願寺では、立教開宗七百年記念のために草稿本が原寸大の写真版として出版せられました。今ここに持って来ているこれがその写真版であります。御草稿本はお弟子の性信房が伝えて、性信房の開基である東京坂東の報恩寺の宝物としてありましたが、今は浅草別院経蔵の金庫に保管されております。この御草稿本は、消えた所も、紙が継いである所もあり、中には紙の裏やら、反古紙やらに書いてあるのもあります。これが御草稿本なのであります。

又、西本願寺にも、御真筆の『教行信証』と伝えられているのがあります。それは蓮如上人が吉崎の御坊においでになった時、吉崎の御坊が火事で焼けた。その時に本向坊という人が、この書物は大切な御聖教故燃やしてはならぬと思い、腹を裂いて中に入れられた。本向坊は焼死されたが御聖教は燃えずにすんだ、だからこれを「腹籠りの御書」と俗に言っております。

今から十年程前に中沢氏の『史上の親鸞』という本を買ったが、それをこの頃読んだ。それによると『教行信証』は、聖人五十二才御製作でなくて、恐らく聖人が関東から京都へお帰りになったあと――六十三才にお帰りになったのですが――その後十年程の間、七十二、三才頃迄にお書きになったのではないかということが書いてある。

中沢さんの説は、聖人は六十二才迄関東においでになり、その終りの五、六年に聖徳太子のお書き物を御覧になって大変感激された。それから大変熱心に布教をされた。沢山の弟子が出来たが自分を顧て懺悔をなされ、こうして居れぬとの思召しで京都へお帰りになった。自分の身体もいつ駄目になるかわからぬから、自分の頂いた教えを伝えておきたいと思って『教行信証』をお書きになったのであろう。それから常時書物の御製作にかかられたのではなかろうか、と書いておられる。

中沢氏のこの研究に就いては、私は深く自分に研鑽しなければならぬと思う。六百年この方多くの学者達が研究して来たが、中沢氏は色々の書物を調べた揚句この説を立てられた。色々と気付かぬ事を気付かして貰った事を喜ぶのであります。

私は学校に居って毎日二時間ずつ、二年間『御本書』（『教行信証』）の講義を聴いたり、教理史や、宗乗、余乗の学問をしたが、その後ずっとその方の学問はしておらないので、くわしい事はわかりません。聖人が五十二才にお作りになったのだから、自分も五十二才になった時、この書物を深く味わいたいと思っておりました。

SAMPLE
Shosh-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

明治四十四年『歎異鈔講話』が出来た時に、『教行信証』を味わい、それを極く平易に、自分に味わっただけを発表したいと思い、『精神界』にその第一回を出した。が、その後ずっと怠っておって書かなかった。それから二十年経ちます。

本年から法座毎にぼちぼちお味わいさせて頂こうと思います。そして最近の日本精神を明らかにし、聖徳太子の御精神を明らかにして行くと共に、『教行信証』を味わい明らかにさせて頂きたいと思います。親鸞聖人のお徳を慕うておいでになる皆さんと共に味わって自分に教わりたいと思います。皆さんは別にこの書物の綱格だの或いは道理というものをお聞きになるのでなく、至心にただ聖人のお言葉を聴聞して、そのお言葉の中に、自分の助かる道を聞かして貰い、仏法に就いての明らかな道を進んで頂けると結構と思います。

学者達は、聖道門だとか、浄土門の綱格だとかいうことを論じておるが、私はそんな事を論ずるのでなく、一つ一つのお言葉を今日の日暮しの上に味わい、御教えを受けてゆこうとこんなに思っているのであります。

そこで今読んだ所でありますが、これは、『教行信証』の序文であります。別序、後序というのが別にあるので今読んだこの序分を一般に「総序」とよばれています。総序は聖人が仏様の眷属としてお書きになり、聖人の御信心の源を書いてあるのであります。後序には『教行信証』をお書きになる由来を充分に書いてあります。

「窃に以みれば、難思の弘誓は難度の海を度する大船」と書き出され、終りに「斯を以て聞く所を慶び、獲る所を嘆ずるなり」とあるこのお聖教の思召しは、阿弥陀さんの御本願を聴聞して、暗い胸の中を明らかにさせて頂いた、そのお蔭を喜び、頂いた一切を讃嘆したいという心持である。「難思」とは、思い難き——不可思議——である。凡夫が自分でもってこういう具合だから、ああいう具合だからと計ることが出来ないのである。広大だという事を現わしてある。「弘」はひろい、「誓」はちかい。阿弥陀さんの本願を弘誓という。くわしく言えば四十八願、詰づめて言えば十八願、もう一つ言えば「願わくば我作仏して聖法王に斉しく、生死を過度して解脱せざる靡けん」と仰った願である。「難思の弘誓」というのが一番もとである。阿弥陀如来の広大な本願が、お釈迦様の胸に現われ、七高僧と現われて、それが伝統相承して親鸞聖人の胸に宿らせられた。そのお蔭で聖人自らが明らかな身になられた。その喜びの余りこの聖教を書くと仰ったのであります。だからこの『教行信証』という書物は初めから終りまで阿弥陀さんの御本願の言葉が書いてあるお聖教だと言ってよい。教も本願なれば行も本願、信も本願なれば証も本願である。「若は信、若は行、一事として阿弥陀如来の清浄願心之廻向成就したまえる所に非ざること有ること無し」である。このお聖教の中にお書きになってある事は、全てそういう思召しである。自分が信ずるのも、称えるのも、有難いと思うのも、全て如来様のお与えである。阿弥陀如来の本願がそうさせて下さるのである。それでこの『教行証文類』全てが自分のはからいでなく、阿弥陀様の御本願が自分の胸に溢れ出て、自分の手先の筆に動いて現われて下さったのだとの思召しであります。それでこのお聖教の全体は、聖人

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

のお筆に依って書かれてはおるが、仏様の本願がそのままにこのお聖教の文字となって現われて下さったものなのです。

「更に親鸞珍らしき法をも弘めず、如来の教法を、われも信じ人にも教え聞かしむるばかりなり」と非常に謙虚なお心持なのである、又非常に自信の強い思召しである。小さい自分の思いではない、自分の経験をもとにしたものではない、久遠劫の昔から栄えておる阿弥陀如来の御本願が現われ出て下さったのであるとの思召しをお書きになったのである。

善導大師は聖人が七高僧の五番目と崇めておられるお方である。この善導様は『観経』の講義をお書きになった。今迄の人が窺われなかった深い意味を発見してお書きになった。そういうところから聖人は『正信偈』に「善導独り仏の正意を明らかにし」と仰っておられる。この善導様が『観経』の講義をお書きになる時、お釈迦様が化仏となって現われ、その化仏のお指図に従ってお書きになったのである。それが今日の『観経四帖疏』即ち「玄義分」「序分義」「定善義」「散善義」の四巻の講義である。聖人は、化仏の教えを一々お受けなさったというよりは、阿弥陀如来の本願が善導様の上に現われ出て下さったのだとお味わいになられたのであります。

善導大師の『観経四帖疏』のほかに、善導大師の師匠道綽（どうしゃく）禅師の『観経』の講義『安楽集』がある。日本では法然上人の『選択集』がある。やはり『観経』のおこころを和らげられたお聖教である。それに対して聖人の『教行信証』は『仏説無量寿経』の中心の思想をお書きになったものであると窺われます。これは顕の道をお書きになったのである。

浄土真宗の教えというのは『仏説無量寿経』である。『仏説無量寿経』の宗とするところは、仏の名号である。そして「仏の名号を以て経の体と為る」と聖人は仰せられた。『無量寿経』の根本はこの本願である。この本願をお説き下されたのが『教行信証』である。私はこれから皆さんと一緒に『教行信証』を拝読させて貰って、その一つ一つの御言葉の上に聖人を通して、阿弥陀如来の御本願に触れさせて頂き、本願の思召しを信じて日暮しをさせて頂きたいと思います。『教行信証』の中に、聖人自らが喜びを申し述べておいでになる様（さま）は、丁度忠臣が二君に仕えず貞女二夫にまみえずというように、又、子供が親を慕うが如く、阿弥陀如来をお慕いになっておられることであります。

私共は善いにつけても、悪いにつけても、この世の色々の点に於いて、常に助けにゃおかん、一切衆生を仏にせにゃおかぬという大悲弘誓のお力を仰ぎ、自分も助かり、一切衆生も助かるという強い信心の道を歩かして貰いましょう。

仏は、一人でも助からぬ者があれば、仏にならぬと仰せられる。その切ないおこころを自分の胸のうちに頂き、自分が助からねば阿弥陀様はおいでにならぬのだと強い信心を頂いて、喜んで御恩報謝の生活をさせて貰いましょう。全てが本願のお手強さの現われだと喜び合うてゆきたいと思います。今日はこれだけにしておきます。

（昭和七年一月二日・明達寺初お講）

SAMPLE
Shoshi-Shissin.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

第二講

『顕浄土真実教行証文類』、略して『教行信証』（『御本書』ともいう）は親鸞聖人の主著であります。大抵の書物の題名は、その書物の内容を簡単に現わしておるのであります。この題号もそうであります。「顕」というは顕わす。「浄土」というは、道綽禅師が仏教を聖道門と浄土門とに分けられた、その浄土門の流れを相承して、善導大師、源信僧都、法然上人と伝わって我が親鸞聖人に到ったのであります。その浄土の教え、その「浄土」であります。「教」は教え、「行」は行う、或は修行、「証」はさとり。教によって生活があり、生活に依って証りの果報を得るのであります。「文類」の文はぶんという字を書きますが、お経の言葉や、お経を相承された先賢達のお言葉を文といいます。「類」というのはたぐい、お経のお言葉を類をもって集めるという意味であります。つまり、浄土の真実の教行証を顕わす文類、こういうことになります。

このお書物は三部経や七高僧のお言葉を集めてくわしく言えば、二十一部の経、四部の論、三十八部の釈、一部の外典を頂いて集め、要所々々に聖人のお言葉が入っております。「文類」といわれるように部門分けをせられてあるのであります。ここに聖人のお骨折りが窺われます。

お経の初めに「如是我聞」という言葉があります。釈尊のお弟子方が、釈尊から教わった事を記されたその最初に出てくる語です。聖人は御年を召してから自分の信心の喜びを書き現わされましたが、何から何まで皆仏の教えから流れ出たものであることをお味わいになりました。ここに如是我聞のおこころがあり、「更に親鸞珍らしき法をも弘めず、如来の教法を、われも信じ人にも教え聞かしむるばかりなり」と仰せられることがそこなんであります。

南条文雄先生がお説教された時、初めから終りまでお聖教のお言葉がつながって出て来た。私は、先生はちっとも自分の言葉を仰らんなあと思った。私も近年御信心のお話をする時、初めから終りまで御和讃と『御文』その他のお聖教のお言葉が連続的に出て来ます。自分が新しく考え出した言葉よりもお聖教のお言葉の方が一層適切に自分の心を現わしているように思います。この頃になって漸くこの「文類」というお言葉をこの本の題号に付けられたところに、聖人の非常に謙虚なお心を味わうのであります。他に『浄土文類聚鈔』『浄土三経往生文類』『往還廻向文類』という文類がある。その他沢山の御著があるが、どの書を読みましても聖人は人を教えるというような態度が見えません。習うておられる、話をしておられても習うておられる。どのお聖教にもそのお心持が現われております。或る仏教以外の学者で、『教行信証』を読んで、親鸞は気違いのような男だ、人の書いた文句ばかり集めて本を出しておる、と言うた人があった。そこが聖人の聖人たる所以でありまして、自分の言葉でない、初めから終りまでみ教えを受けてゆくという態度であられます。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

善導大師が阿弥陀如来のお言葉をお受けになって『観経』の講釈を書かれたように、親鸞聖人も、阿弥陀如来や、釈尊や、七高僧のお言葉を聴聞しながら筆を取っておいでになったという事が、この「文類」とある言葉の中によく味わわれます。

聖徳太子の『十七条憲法』の第三条に「詔を承けては必ず謹め」とある。このこころが「文類」という言葉に現われておる。仰せを聞くのです。教えを聞くのです。だから書物全体が「聞く所を慶び、獲る所を嘆ずるなり」である。聖人の御著述に『浄土和讃』『高僧和讃』『正像末和讃』があるが、これらはことごとく讃嘆の御著述であります。仏をほめてちっとも私事を交えない、素直なお気持で書かれてあります。こういう事は余程年を取らないと味わわれない境界であります。

孔子は、「三十にして立ち、四十にして惑わず、五十にして天命を知り、六十にして耳従う」と仰った。耳従うということが教えのままに素直にものが聞けるということであります。無礙自在の境地である。「忤(さか)うこと無きを宗と為せ」と仰った聖徳太子のおこころがそれである。太子はこの境地を三十二才の時にお味わいになっておってあのお言葉が出たのであった。清沢〔満之〕先生はよく、年だ年だと仰った。けれども修養のない者は、年が行けば行く程頑固になる。耳が従うの反対で、耳に逆らうておる。男も女も道を聞いておるものは年が行けば行く程素直になるのだ。誰の言う事でも尤だということになる。それが内容の無い者は年が行くとかちかちになる。我が身一人心得顔になる。これは恐しい事である。その罰で、この世に於いて淋しい冷たい日を送り、未来永劫焔の中、氷の中に堕ちて苦しまにゃならん。だから六十にして耳従うという事は世の幸せな人の事である。聖人はお年を召されてから「文類」と名の付く書をお書きになった。非常に尊い事である。外の方の御著述にはこういうものは珍しい。この書物の名の中に、聖人の独特のお心持が現われています。御自分の名をお書きにならず「親鸞集」、集めたと書かれてある。

今から二十年程前になるが、東京の或る人が、この頃こういう本を出したから読んで評してくれというて来た。初めから終りまで良い事ばかり書いてある。宗教や教育や人の感心する文句をうまくつなぎ合わせたものである。私は、これを書いた貴方はえらい方のやうです。が、この本の内容は皆こしらえ物でモザイクだ、と書いてやったことがある。この人は著作をして自分の教養の成果だと思っている。それも無理はない事かも知れぬが、それはまだ内省が足らんのです。

自分の一挙一動をしかと内省する時、その一つ一つ、全てが如来様より聞いたもの、習うたもの、皆貰いものであることを知らされるのであります。私はじっと坐って身の廻りを見渡してみると、何もかも貰い物である事を感じます。衣も貰い物、袈裟も貰い物、着物も襦袢も机も皆貰い物です。そうすると、これは誰に頂いた、これは誰に頂いたとその人の親切を思い出して喜ぶのであります。これは自分の信心の上の喜びにも味わわれることであります。こういう話をすると御坊さんはうまいもんじゃと言います。けれども坊さんは自分が稼いだからと思っている向きが多いです。本当は自分で稼いだ物は何も無い、皆頂き物なのだ、それがわからんのである。ここに麦がある、麦は自分で拵えた物か。畠に種を蒔き肥料をやったという。種を畠にただ蒔いても太陽の

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

お照らしが無ければ、水のお与えが無ければ麦は出来ない。私が耕作したというがその手は親に貰ったものだ。買って来た種の元が考えられるか、ただ出来た物は何一つ無い。

聖人は二十九才の時法然上人に教えを受けられた。そして信心の道が開けた。そして自分の今日の信心の喜びのもとは『無量寿経』にある。それが伝統相承されて私の胸に流れて下さったのだと、流れを聞いて本源を尋ねられたのです。そこに「文類」と名を付けられた訳が出てくるのです。浄土真実の教行証を顕わす文類であります。この書は、『教行信証』ともいわれている。全て六巻ある。「教の巻」「行の巻」「信の巻」「証の巻」「真仏土の巻」。その真実の教行信証に対して、前五巻の方便の教行信証を顕わしておるのが「化身土の巻」、それで『教行信証』は六巻になるが、要するに真実の教行信証を顕わしてあるのであります。

題号にはこの書『顕浄土真実教行証文類』とある。実際には「信の巻」があるのに題には信の字が無い。それには訳があるのです。題号のこの顕の字が信の心です。顕という時に信心の信がそこに納まっているのです。教行証を顕わすという有難い味わいがあるのです。聖人は行という事と信という事とを一つに味わっておられる。信を題号に出されない。普通信ずるというのは向うのものをこちらに引き受ける時に信という。教えを聞いて信ずる。向うからこちらへ貰いうける。顕わすというのは、こちらに出す。ところが教行証を顕わす、と。信は顕に入れておいでになる。むずかしく言えば顕という字は聖人の自督です。教行証というのは、その自督に対する客観、それに対するものである。だから顕は能信、教行証は所信を現わす。教行証は所詮の法である。浄土真実教行信証文類と書かれるはずの所を顕浄土真実教行証文類と書かれる。信という字を抜いて顕という字を書かれる非常に味わいの深いことである。一段一文の底に聖人の御信心が顕われ出て下さるのだ。御信心を顕わされるのだからしてこの顕という字は自督、お領解を現わす。この『御本書』六巻は初めから終りまで聖人の御領解である。告白である。信心が顕われ出て下さる。顕という字は阿弥陀さんのお告げの信だと仰る。お告げは何処から出て来るか、先ず教えである。教えの中に信が納まっている。仏の骨折り――行の中に仏の信心が現われておる。その仏の信心の報いが顕われたのが証、信心が因で証は果であります。教えの中には信心の因とそこから開ける証（さとり）というものがあります。それを顕と言われる、それを信心だと味おうておられる。だからここへゆくと信心というものは、教行証三法に引き受けられた信である。教行証の三法に信が摂められてある。行を離れて信もなく、信を離れた行もない。教行証を信ずる、その信ずるということがもう一遍進んで顕ということになる。だからこの顕という字は、顕わすというよりも、もう一つ聖人のお心持からして言えば、浄土真実の教行証が現われ給う、どこに現われ給うかというと自分の上に現われ給うのだ、自分の心の中に現われ給うのだ。段々味おうてくると、自分の心に弥陀が、それから三経七祖のお言葉が、或いは御精神が、或いはお徳が我々の胸の中に現われ出て下さるのである。信ずる心も、念ずる心も、弥陀如来の方より廻向しましますのである。皆貰いものである。我々のこの毎日の信心も貰いものである。肉体も貰いものなら、着物も、田畑も、家も皆貰

SAMPLE Shosai-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

いものである。貰いものだと思う心までが貰いものである。これが他力廻向の信心である。全てが自分の心に頂かれた時に初めて他力廻向という味わいがある。空っぽのものに他力廻向はありません。

聖人は大変穏やかな、孔子様の言われた「耳従う」という素直な心持、聴聞のお心持でこのお聖教を書いておいでになる。そのお心持の現われがこの本の名になっている。だからこの『顕浄土真実教行証文類』という大綱をしかと味わうことによって、聖人のお聖教御撰述のお心持がすっかりわかる。阿弥陀如来の広説を述べるぞ、阿弥陀如来の境界を明らかにするぞ、或いは教相判釈するぞ、或いは宗旨は繁昌するぞ、などそういう事は思っておられない、お釈迦様も思ってはおられないのであります。

聖人は一生寺を建てられなかった、道場も開かれなかった。人が勧めても、自分にはそれを建てる値打ちはないのだと仰った。ここに聖人の思召しを今更ながら尊く感ずるのであります。

又聖人は「親鸞は弟子一人ももたず候」と仰せられた。ここに聖人の面目躍如たるものがあります。聖人は弟子を持っておられたではないかと証拠を出す人もいるが、聖人自ら「わが弟子」などと名付けられたのではありません。

弘法大師御直筆の書の中、大師の戒行を受けられた人の名が書いてある。それで見ると弘法大師も頭の低かった人であったということがわかる。何故かというと、戒行を受けた人と同列に自分の名をお書きになってある。決して自分が師匠だとか、一番偉い者だとかいうことを言っておられない。自分の弟子だとも仰っておられない、同列だと仰る。親鸞聖人も自分が交際している人をわが弟子と仰らない。御同朋御同行と仰せになる。師匠顔をされない、ここに聖人の謙虚な心持が現われている。そして「文類」と仰るところにこの心持がはっきりと現われているのであります。一つも自分のものを持たれない、すっかり手放されるのであります。

お経の中には、不止善・不止悪ということが書かれてある。善の死魔です、悪の死魔です。昨日聖徳太子の『勝鬘経義疏』を読んでいる時に、愛も死魔なり、憎も死魔なりという御教えがあった。無暗に物を愛するとそこに執着が出る、憎む所にも又妨げが出る、だからあんまり好きなのも障りになるし、嫌いなのも障りになる。

聖人は、自分の慶ぶ心、聴く心がわかってくると、この歓びの源はどこかと探ってゆかれる。その大本を探ってゆかれる時に、一番の大本をどこに見られたか、阿弥陀如来の本願である。三部経の御教え、七高僧の御精神――お言葉、全ての根源は阿弥陀如来である。法蔵因位の本願海から流れ出て下さったのだ。『無量寿経』は、「如来の本願を説くを経の宗致と為す。即ち仏の名号を以て経の体と為るなり」と仰せられるように、『教行信証』六巻はすっくりこのお言葉を以って味わう事が出来ます。

阿弥陀如来の本願、名号の功徳により、真如法性の境地に生まれることが出来、生活の上に溢れ出て下さるこのお味わいを昔の聖賢のお言葉の上に発見して、喜びつつ、仰ぎつつ、考えつつお書きになった。「悲喜之涙を抑えて、由来之縁を註す」と「後序」

SAMPLE
Shosin-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

の文にお述べのように、嬉しさの余り、涙を泛べつつ、尊さに合掌しつつお暮しになった。その聖人のお姿をまざまざと今この目の前に仰ぎ見ることが出来るのであります。

（昭和七年一月三日・明達寺初お講）

第三講

窃に以みれば、難思の弘誓は難度の海を度する大船、無礙の光明は無明の闇を破する慧日なり。

聖人がだんだん年を召されて、しかと自分にお考えになればなる程、自分は不甲斐ない者であるということを深くお感じになった。どちらかというと聖人は気の弱い、後へ控え勝ちのたちの方であった。しかし、力強い道を開いてお進みになったが――比叡山で学問をして居られた時も、叡山の坊さんの仲間に入って競争をして行くような気が無い。ただその中に居って自分の不甲斐なさ、足りなさを泣いておられた。しかし、自暴自棄に陥るような方でなかった。自分の不甲斐なさを知れば知るほど、いよいよ自分が助かって行かねばならんという心が燃え立った。或る時は六角堂の観音様に百夜の祈願を寵められた。しかして法然上人の教えによって阿弥陀如来の本願のお手強さを聞かれた。どうかして助からねばならぬと思って来たその心は、自分の小さな心でなくて、阿弥陀如来の助けにゃおかぬという大願業力が知らぬ内に響きこたえて下さったものであるという事を気付かせられた。助かりたいという心は、助けにゃおかぬという本願のお手強さが自分の胸に流れ出て下さったのだという事をお味わいになった。助けるとの願が我が上に成就して助かるに間違いないとの安心を得られた。

聖人はうぬぼれ根性の無いお方で、関東に四十才から六十才まで約二十年間お住まいになったが、寺一ヶ寺建てられなかった。たまたま誰か建てると言うても、大きな物を建てるな、平屋より少し高めのものしか建てるなと仰った。寺を建てて人を教える資格の無い者だということを始終思っておられたのです。弘法大師は高野山で、伝教大師は比叡山で沢山の人を集めて教えられた。即ち伝教大師や弘法大師の宗旨は学校が根本であり、沢山の弟子がありました。聖人は「親鸞は弟子一人ももたず候」と仰って学校を建てられない、寺を建てられない。今日真宗にも大学がある。誰が本当の教師になれるか、私が先生になるという者があればそれは曲者である。聖人より偉い者でなければなれぬ。聖人は先生にはならぬと仰った。学校を建てたり、寺を建てたりする事の出来ぬ内省の深い、頭の低いお方であったのです。

法然上人より特に可愛がられた勢観房源智という人、このお方は、お話をしておる時でも人が八人以上になればお話を止められた。何故かというと、どうしても聞く人が多くなれば、煩悩が多くなり、聞かす気になるからである。今頃の坊さんは、参りが少ないから説教は止めと言う、勢観房は参りが多くなれば説教は止めと言われた。これは謙虚な心である。聖人もやはり勢観房と同じである、始終自分を省みておられる。だから人の所迄手が出せないのだ、ただ自分の助かる道を一生懸命求められた。自分の胸

SAMPLE
Shoshin-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

の中に助からにゃならぬという願いを見出された時に、それは助けにゃおかんという本願の現われだという事を聞き出された。だから聖人に、ぱっと応えた救いの声は阿弥陀さんの本願なのであります。

「窃(ひそか)に以(おもん)みれば、難思の弘誓は難度の海を度する大船」。ひそかに、しかと考えてみると、難思とは思いがたき、算盤が合わん。我々は算盤をおく、人が菓子箱一つ持って来ても、自分が今迄世話を焼いたから貰ったのだと、菓子箱の目方をかける、やいた世話と菓子箱とをくらべてみる、いくら位する品物かと考えるのはそれだ。お慈悲というものにも算盤をはじいてみる。我々は人に捨てられた時か人から軽蔑せられたという時にもすぐに目方をかけてみる。自分ではからうのだ、そして暗闇に行くのだ。ところが聖人はその目方をかける心を自力のはからいと仰る。雑行雑種自力の心でもって目方を計ってみて、足らぬと思って絶望するのが凡夫である。はからうこと無くつくろうなき心を難思という、算盤桁が合わんのだ。

弘誓とは広い誓い、阿弥陀さんの本願である。本願は、十悪五逆五障三従の悪人も助けにゃおかぬ、一切衆生一人も残さず仏にせにゃ我は仏にならぬと仰る広い心、広い誓いである。子殺しも親殺しも捨てない、一切の人が愛想をつかすような罪人でも一人も捨てぬと、算盤勘定では合わない者を助けねばならぬ、救わねばならぬという大きな誓いがある、それが本願である。その誓いを聖人は「難度海を度する大船」と仰った。渡り難い海を渡す大きな船だと仰る。渡り難いとはどこか、この娑婆である。毎日の日暮しをみてみると朝から晩までからっと晴れているということは先ず無い、やはりどこかに曇りが出てくる。御開山は「貪愛瞋憎の雲霧は常に真実信心の天を覆う」と仰った。色んな雲が出てくる、中々娑婆はむずかしい。中国や、アメリカや、ソ連や、インドその他の間に起っている問題も、悩みの源は遠い所にあるのではありません。内に悩みの源があるのです。家庭や隣り近所の間に衝突がある間は、遠い国との間の争いも無くならない。争いの源は皆一つなのです。人間には皆逃れることの出来ない悩みというものがある。それが人の世の常である。その悩みというものは離れられないものと気付かせて下さる方があるのです。悩みがある時は、それを反省せしめられて正道に立ち返らねばならない。正道とは何か、弘誓です。自分はよく腹を立てる者だとじっと心を静めると腹立ちもどこかへ行ってしまう、腹立ちはひょっと来るものだから落ち着けばなくなる。内輪同志の間でも時々曇りが起こってくる。親爺か、婆か、子供かどこからか起こってくる。ところが世の中は一人怒ると一緒になって怒る事になる。苦しみが起こり、怒りが起こった時それを受け取らぬ事です。他の者迄一緒にならぬ事です。そしたら腹立ちもやがて消えてゆく。そうすれば皆柔和になる。相手が腹を立てずに居ると、立てた者は、ああよかった、相手になって貰わんでよかったと思う。我々は大きな願いに心が目覚めて行かねばなりません。聖人は、阿弥陀如来の御本願をじっと味おうてゆかれたのです。難度海は凡夫自力のはからいである。それを渡して下さるのは阿弥陀如来の弘誓である。

我々は大願業力の船に乗托して、助かるに間違いないと信じて行くのです。凡夫のはからいで考えればどうしても算盤が合わぬ

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

事であるが、その算盤の合わぬ所に難思の弘誓がある。阿弥陀如来の誓いは大きな船なのです。聖人はこの船に乗托せり、と仰る。「本願力にあいぬれば　むなしくすぐるひとぞなき」この手強い本願、聖人はいつもこの本願にすがってゆかれた、常に大きな願に乗托してゆかれた、願は宇宙の本体の顕現であると信じられた。その願は阿弥陀如来の大願業力から出される願である。

弘誓の大船に乗り込んでゆくという所に御開山の力ある真実の行が窺われるのであります。

（昭和七年一月六日・北安田北川家）

第四講

聖人が『顕浄土真実教行証文類』を御製作になったそのおこころのまことを「難思の弘誓は難度の海を度する大船」とのお言葉に述べられた。そしてこの「総序」の終りの方に「噫（ああ）、弘誓の強縁は多生にも値い亘（がた）く、真実の浄信は億劫にも獲亘（がた）し。遇（たまたま）行信を獲ば遠く宿縁を慶べ」とお書きになって、御自分の救われるその弘誓に会うたことをお述べになっておいでになる。この文を見ると聖人の胸の中に、この弘誓がまるっきり納まっている事が窺われます。弘誓は阿弥陀如来の本願の事である。何故そういうかというと、阿弥陀如来の本願は、自分一人がよい身になればよいというような手狭な願でない、十方衆生一人も残さず助けたい、一人でも悩んでいる者があれば自分も悩む、十方の一切の衆生と共に悩み、共に喜ぼう、十方衆生ことごとく仏にせずんば我は仏にならん、それが誓いであります。

我々は皆願いを持っておる。例えば、自分一代の内に自分が作れるだけの田を買おう、或いは土蔵を建てよう、というようにその願いがその人の徳を作り出すものです。小さな願いを持っておる者は小さな人間、大きな願いを持っておる者は大きな人間である。普通の人間はこうして生きておっても、願いを持って生きておるのやらおらんのやら。親に産んで育てて貰ってきたのに勝手に一人で大きくなったような顔をして、そして年頃になれば子を産み、楽に生きて行こうとか、楽に子供を育てようとかそういう方面の願いは起こすが、その間にもただ煩悩にあやつられてこの人生道中を何処迄行くやら、わかりもせず、考えもせずして、毎日出たとこ勝負でその日その日を暮らす、そのうちやがて死んでゆく。味気ない生き方をしている者が多い。人間には未来を当て込んだり、心配したりするという面があるが、これは一面から考えて取り越し苦労である。未来はどうなるだろうと心配するのは、願いがはっきりせんからだ。何処へ行けばよいやらわからないのだ。ただ毎日の日暮しを外からあやつられて生きているものだから未来が心配になる。未来がどうなるやらと心配するのは、今がどうなっておるやらわからん者である。色々な煩悶が起こり、迷いが起こるということは、未来の光が無い事なんです。無いということは自分の願いがはっきりしないという事である。自分は何しに生きておるか、それがはっきりしないのです。人生の意義と言おうか、自分がこの世に何しに生まれて来たと言おうか、この世に於ける仕事と言おうか、それらの事がわからないのです。何処迄行くか、行きつく所を知らんのです。悟りを開くということ

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

は、明日の事は明日の風が吹くと言うたりすることでない、今足下に火がついておる我々なのだ。未来の用意はしておかねばならぬ、だからというて、食べ物、着物の用意をし、年を取ってからのためにお金を貯めて置かねばならぬか。それもよかろう、が、それで本当に未来の安心が出来るのか。金の値打ちが無くなれば貯めた金は何にもならぬ。ドイツが財政に困った時、風呂に入るにも二万マルク持って行かねば入れぬという時があった。金の値打ちが無くなれば風呂にも入れんのだ。私の知人に、工科大学を出て鉱山をやって居った人が居た。その仕事がいやになって、仏教の研究をしようと思い、鉱山を売って現金にし、金を銀行に預けた。子供が何人か居った。そこで、男の子は大学迄の費用を、女の子は嫁にやる費用を計算し、生活費にいくら、女中二人と下男にいくらとちゃんと計画を立て、山の上に家を建てて住んでいた。海も見え、立派な庭も作って、お経を読み、仏教の研究をし、私らを招待するように準備もしていた。ところが、欧州大戦以後物価が騰がった。そしたら予定ががらがらと狂うた。二千円で大学を卒業させる事も出来ず、千円で嫁にやれると思ったのに当てがはずれた。この人は愚痴を言った、こんなくらいなら山を持っておればよかったと。又これは昨年の話だが、暮になって品物が段々下がる。株も下がった。一時は二百円の株が三十円迄下がった。株は紙になって貰い手もない。生命保険に入っても満期頃になって物価が騰がれば、それこそ風呂賃もないようになる。日本の国がこうして安定している以上は安定だが――。株や金や山などの財産をもって安心して居っても先の事は当てにならない。身体が丈夫だからといってもそれも当てにならぬ。今日も電報を貰った。博多のお医者さんが急に死んだという電報である。この方は私がインドへ行く時百円下さった方である。私が博多へ行く時は一人で色々世話をして下さった。丈夫な医者で、殺しても死なぬような人であった。私は春には行く予定であったのに、あの人は私を見ずに死んだ。見ずに死のうとはよもや思っておらなかったであろう。世の中の事はわからんものである。考えれば考える程何処にもつながり場がない、自分の決めたものは間に合わない。そこで私達は自分の心の底に湧いている願いを見るのです。望みを見るのです。自分の願いがはっきりしたら、その成就のために動き、そして進むのです。我々はただ小さな量見で今日の衣食の事にかかずって暮したり、怒ったり怨んだり、叩き取ったり叩き合ったり、それは自滅の道であります。本当は我々には本然の願いがある、その願いを聴いてゆくのです。阿弥陀如来は一切衆生を助け、誰も悩みの無い、苦しみの無いそういう世界を開きたいと仰る、それが願いである。その願いは皆やはり私らの願いである。無量寿の生命を貰って大きな世界を開いてゆく、その願いに生きてゆく。身体は死ねば燃やされるけれども、なくならぬ命を頂いてゆく。その命を今本願という形をとって味わわれる。我々はその本願に乗托して行く。段々つきつめて行くと、末の見込みが立つということは、この本願に目覚めて自覚することである。人間にとって成仏ということが一番大事なことである。金の世界でない、財産の世界でない、身体の世界でない、仏の世界である。限りなき生命（いのち）と限りなき光明を自分のものとして生きる。仏になるより外に安心な道はないのだ。自分が他を批判してこうだと言うより、自分自身を明らかにするということが大事である。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

聖徳太子は『十七条憲法』の第二条に「篤く三宝を敬え。三宝とは仏・法・僧なり。則ち四生之終帰・万国之極宗なり」と仰った。四生之終帰とは、生きとし生ける者のたより場所、そのたより場所が三宝である。仏にたよるより外に助かる道はない。仏をたのむという事は、本願力に乗ずる事である。仏の方に向うてゆくのです。仏は無量寿仏である。その仏は、自分の真の願いの上に現われ給うのである。その仏をたより、信じて向うて行く時、明らかな光が拝まれる。死んだら何処へ行くという事をきめるのでない、仏の心の中に住まわして貰う。聖人は「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなり」「念仏もうさんとおもいたつ心の発るとき、すなわち摂取不捨の利益にあずけしめたまうなり」と仰る。仏の大きな誓願にはからわれてゆく。その精神を「窃に以みれば、難思の弘誓は難度の海を度する大船」と仰った。自分で渡ることの出来ない海を、難思の弘誓でもって易々と渡してもらえる。弘誓のお手柄で本願力によって易々と生死の苦海を渡らしてもらう。御和讃に、

生死の苦海ほとりなし
ひさしくしずめるわれらをば
弥陀弘誓のふねのみぞ
のせてかならずわたしける

とある。

本当の助かりは、自分一人でない、一切衆生と共に行こうという願いに生きる所にある。もろもろと共に手を引き合うて生きて行く。この本願の弘誓を我々の願いとして、この願いに乗托して生きる。そこにお助けの道がある。その道を浄土に往生する道中と聞かして貰うのであります。

（昭和七年一月八日・安田徳三郎家）

第五講

聖人が老後に於いて筆をおとりになった『教行証文類』「総序」の御文を正月から話をしておりますが、その続きを今晩も話します。

「窃に以みれば、難思の弘誓は難度の海を度する大船」、これだけのお言葉でも精しく味わえば一生涯かかっても味わい尽くされない程広大なのであります。『教行信証』六巻全てがこれだけの言葉に納まっておるというてもよい位であります。「噫、弘誓の強縁は多生にも値い叵く」とこの「総序」の中に仰ってある弘誓は本願である。阿弥陀如来の本願、その本願のお手強さで渡り難い生死の苦海を渡るということは、人生全ての悩みを解脱し、迷いの世界から安養の浄土へ至る道である、ということを仰せられた。聖人が全てを阿弥陀如来の本願にうちまかせて「本願や名号、名号や本願、本願や行者、行者や本願」と言われたように御自分と

SAMPLE
Shashi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

本願が一つになってお味わいになっておいでになる。だから聖人がお徳を讃嘆されるというのは「難思の弘誓は難度の海を度する大船」これだけで結構なのである。が、次々御文を味おうてゆくことが大切なのであるから、第一段のおこころを味わい尽くしたというのでなく、味わいかけたという気持で次のお言葉に移ろうと思います。

「無礙の光明は無明の闇を破する慧日なり」、無礙というのは障りが無いということ。太陽の光は、雲とか雨とか霧とかいうものに妨げられる。穴に入れば太陽の光は見えない、閉ざした土蔵の中に入っても太陽の光は見えない、これも障りがあるからである。人間が徳を行うても色々の障りがあって、その徳の光が照らされないことがある。ところが、阿弥陀如来の無礙光と申します光明は何ものにも妨げられない。聖人は十二光仏といって十二の方面から仏を讃嘆されておる。その中に無礙光というのがある。天親菩薩は御自分の御安心を『浄土論』の偈文の最初に、帰命尽十方無礙光如来と述べられた。聖人は阿弥陀如来の全体を無礙光の中に納めてお味わいになったのである。そして御自分の御本尊として崇められたのであります。

「無礙の光明」は障りの無い明るい光、法蔵菩薩が世自在王仏の御前に行って、世自在王仏のお徳を讃嘆された最初の言葉に「光顔巍巍（ぎぎ）として威神極りなく。是の如きの燄明ともに等しきものなし。日月摩尼珠光の燄耀も皆悉（ことごと）く穏蔽（おんぺい）して猶し聚墨の若し。如来の容顔は超世無倫なり。正覚の大音は十方に響流す。戒聞・精進・三昧・智慧・威徳伜（ともがら）なく、殊勝希有なり」と仰ってある。これは、あなたのお顔の光は尊く、広大にして、太陽や月や玉の光も遠く及びません。このような太陽、月などの光は皆あなたのお光の前に出ると暗い。玉のようなものもその光を失い、又太陽の光の輝く中にも、月の光輝く中にも、玉の光の輝く中にも、あなたのお顔の光は、一段と勝れています。自分の胸は暗かった、ただこの暗い胸があなたのお顔の光に触れて、あなたのお徳に触れて明らかになりました。どうしても明らかにならなかったこの胸を明らかにさせて貰いました、というお礼の言葉であります。この法蔵菩薩が世自在王仏に対してお述べになりました御信心の道が、簡単に言えば、帰命尽十方無礙光如来ということになるのであります。我々はその如来を慕い、如来の無礙の光明に照らされてゆくのです。真宗では各家の内仏に、帰命尽十方無礙光如来、南無不可思議光如来の御名号が懸けてある。この懸けた名号に自分自身の名号が生きるのです。尽十方無腰光如来に帰命するという信心を持っておる人は、毎日毎夜に朗らかな心を味おうておるのであります。

「無明の闇を破する慧日なり」、阿弥陀さんの光明は無明の闇を照らされる。無明とは、釈尊が四諦・十二因縁をお説きになった際、無明という事をあげてある。その四諦の一は苦諦。これは人生の苦しみの有様を述べられたもの。二は集諦、苦しみの原因はどこにあるかを述べられたもの。三は滅諦、苦しみが無くなる——安立の境界。その境界にどうして行くかという事の問いから四の道諦が出てくる。道諦というのは道を問うことである。これが四諦である。次に十二因縁を説かれた。その十二因縁の教えは何を教えるか、あらゆる世の中の苦しみは無明から来る。和讃に、

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

無明煩悩しげくして
塵数のごとく遍満す
愛憎違順することは
高峰岳山にことならず

と無明煩悩の姿を仰ってある。無明――くらがりは何で起こるか。人間には智慧の無い者、馬鹿な者も居る。が、一番の愚かさは自分を知らないということである。それが元になって色んなことに悩む。勝手な作戦をして自分自分の掘った小さな穴にすっこんで人を呪い、世を呪い、自分を呪って暮しておる。原因はどこにあるか、心の闇にある。心が暗いからあの人が悪い、世の中が悪い、家が悪い、親が悪い、子が悪い、連合いが悪いと言うておる。仏は、無明とはこの目をふさいでおることなのだ、自分を知らないことだと教えられる。暗いのは目をつぶっておるからです。目をあければ明らかなのです。地獄行きの種は何かというと自分を知らぬこと、無明であります。外に地獄行きの原因はない。根本は無明であります。その無明が形を現わせば疑いである。暗いから疑うのです。向うがはっきりわからんから、あれかこれかと迷い、当てにならぬものを当てにするのです。それはその人の心が暗い証拠です。はっきり物がわかれば当てがってみる事も要らない。我々が人を疑うて悩んでおる時は、何を見ておるかというと、皆自分の心の暗い影を見ているのです。自分の通りの事を向うの人の上に見てそして悩んでおる。そして向うが悪いのだと言っておる。「疑えば則ち華開かず、信心清浄なる者は華開きて則ち仏を見たてまつる」と、これは『選択集』の中に記されてあるお言葉である。無明が人生の悩みのもとだということは、疑いが地獄のもとだということと同じことである。無明は無智という、疑いという、愚ともいう。だから人を疑うのは無智で馬鹿者である。自分が自分を信ぜられないから人も信ぜられない、その罰で苦しんでおる。だから世の中で苦しんでおる者程業さらしな者は無い。人を怨む者は幽霊になる。自分に確かなものが無いから他に頼ろうとする。自分の不確かな心から向うを見るから向うも不確かと思う。当てにならぬと言うてうらめしいという。自業自得の道理によって苦しんでゆかねばならない。こういう人は勝手にせよ、と言われねばならない。ところが仏は可愛想だと仰って根本的の治療をなさって下さる。

世の中には金が無い、子供がどうだ、やれ妻がどうだ、親父がどうだと言って泣いておる者がある。それは皆愛欲の上から起こる事なのです。その事件の解決をするということも一つの救いである。が、そういう事件の末をいくら世話やいておっても根本の胸が暗い間は何にもならぬものである。仏さんはその根本を憐み、無明の闇を照らされる。「仏かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけりと知られて、いよいよたのもしくおぼゆるなり」と聖人が仰ったのはここの味わいである。「諸仏の大悲は苦あるものにおいてす、心ひとえに常没の衆生を憐念す」、仏は機

SAMPLE
shosai-shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

嫌の悪い顔をして苦しんで暮しておる者には慈悲の心を動かされる。業を苦しんでおれば、その業を持っておる者が気の毒である、どうかして助けねばならぬ、助かる縁が無いかというのが仏の心である。聖人が「無礙の光明は無明の闇を破する慧日なり」と仰ったのは、自分が長い間無明の闇に閉ざされて疑ったり、はからったりして暗い日暮しをして居った、それが仏さんの智慧のお育てによって自分の愚さが照し出されて初めて疑いの闇が晴れて明らかな身にさせて貰ったというお喜びからこの御讃嘆が出たのであります。

本願のお手強さがどうして私らの胸に響くかというと、智慧の光に照らされて響くのであります。だから本願と光明と、即ち阿弥陀様の因位の本願と果上の光明とによって押しつ引きつして助けて下さる。けれどもこの光明というのは、親鸞聖人からいえば法然上人の御教えである。法然上人を「智慧光のちからより　本師源空とあらわれて」と仰っておられる。智慧光は勢至菩薩である。阿弥陀仏はこの世にどういう形をとって現われて下さったかというと、法然上人として現われて下さった。上人のお育てにより暗い心を開いて下さったのだと聖人は仰せられる。

目が開かれるのは全く智慧光の力によってである。自分では自分を見ることは出来ない、内省することが出来ない、それが内省されたのは智慧のお照らしにあずかったからである。智慧の光に照らされて初めて御本願の尊さに目覚めさせられるのです。本願のお手強さが、智慧のおはからいで自身に注ぎかけられるのであります。阿弥陀仏の本願はどうして私に応えて下さるか、光明のお照らしによってである。光明のお照らしは善知識に会うことである。聖人は法然上人の御教えを讃嘆され、その光明はどこから現われるかを味わわれた。即ち、助けねばおかぬ、救わねばおかぬという弘誓の誓いが光明と姿を現わして我々に接して下さる、迫って下さっておる。そこにお助けがある。聖人はお助けを受けた根源を内省せられた。「難思の弘誓は難度の海を度する大船」とその根源を讃嘆せられた。その弘誓が自分のここに迫ってくるのはお称名というものによってである。「無礙の光明は無明の闇を破する慧日なり」、太陽だと御讃嘆あらせられるのである。明らかな身にさせて貰う、それも本願が至り届いて下さったのである。

初めの「難思の弘誓」というのは願を讃嘆され、「無礙の光明」は智慧を讃嘆されたのであります。この最初の二句に聖人は願と智慧を讃嘆されたのであります。

心から聖人と共にこのお言葉を讃嘆申し上げるようになりたいものであります。今晩はこれだけにしておきます。

（昭和七年一月九日・伊藤伊吉家）

第六講

窃（ひそか）に以（おもん）みれば、難思の弘誓は難度の海を度する大船、無礙の光明は無明の闇を破する慧日なり。

SAMPLE
Shoshi-Shisui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

この二句の中に聖人の御信心の源がはっきり記されてあるということはこの前もお話致しました。

流れを汲んで本源を尋ねるという言葉があります。例えば川の水を使う時この川の水はどこから来たか尋ねると、谷間から、更にその谷間の水はと尋ねると、冬の間に降った雪が溜っていたもの。その雪は何処から降って来たか、それは地球全体から蒸発する蒸気が凝結して雪になるというように本源を尋ねる。「窃(ひそか)に思(おもん)みれば」、しかと考えてみると、今日自分が頂いておる信心は、どこから流れ出て来たのだろうか。三塗の黒闇を逃れ、苦しみの境界を抜け出て、渡りがたい海を渡らして頂いた、こうさして頂いたその源はどこにあるだろうか。それは全く阿弥陀如来の本願弘誓にあり、そこより流れ出て下さったのだ、ということが言えるのである。阿弥陀如来の本願弘誓というのは、一切衆生一人も残さず助けずにはおかないという誓いである。凡夫は小さな事を考え、人が苦しんで居ろうが、自分さえよければよいというようなものである。自分が先ず大事なのである。仏さんは一切衆生を自分のものと信じておいでになる。一人でも悩んでおる者があれば仏の心は悩まれるのである。だから衆生一人も残さずに仏にせねば我は仏にならぬと、これが仏の弘誓である。聖人はその仏の心が段々流れ出て自分の心に迄通じて下さったために、渡りがたい生死の苦海を渡らして頂いたと阿弥陀如来の本願弘誓にその本源をお味わいになったのであります。

その次に出て来るのが「無礙の光明は無明の闇を破する慧日なり」、本願を建て修行をして、その願を成就し仏になられたその仏の徳の光、智慧の輝きが「無礙の光明」である。その光明は一切衆生のあらゆる煩悩の底を照らし破って明らかにして下さる。何等の障りが無い。

無明長夜の灯炬なり
智眼くらしとかなしむな
生死大海の船筏なり
罪障おもしとなげかざれ

願力無窮にましませば
罪業深重もおもからず
仏智無辺にましませば
散乱放逸もすてられず

仏の願が成就した時に、帰命尽十方無礙光如来とならせられた。親鸞聖人はその無礙の光を、釈尊、竜樹菩薩、天親菩薩、曇鸞大師、道綽(どうしゃく)禅師、善導大師、源信僧都、源空上人の御心の上に輝き出で給うと味わわれたのである。その光明は何を現わすか、智

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

慧を現わす。仏の智慧の光はどうして我々を照らして下さるか、善知識のお言葉の上に現われ、教えとなって我々の胸を照らして下さるのである。仏の光明に照らされるという事を、何かサーチライトのようなものでピカピカッと照らされるように思っている人がある。伏見の大谷別院に行った折、三十五、六の女の人が、私は昨日仏さんになった、仏の光明に会うた、正定聚の菩薩になったと目の色を変えて喜んで飛び廻っていた。何でもその女の人の話によると、仏を荘厳して、善知識のもとに二、三十人集まって一週間その人の前で話を聞いたそうだ。そして終りの日に如来の光明を拝んだという。仏前にお灯明をあげ、善知識が脇息を横に坐っておる、後に介添役が二人居る、何べんもお礼をさせられると脇息に頭が当たってその中に目がくらむ程ピカッと光る。拝めたかーの声がかかる。拝めましたというと、さあそんなら助かったんだ、正定聚の菩薩だ、極楽まいりは間違いなし、ただ人であったものが、ただ人ではなくなる、だから自分の身を大切にして日暮しせねばならん、沢山御恩を報じねばならないと言うそうである。これはよい事ではない、土蔵法門とか秘事法門とか言うものである。正定聚の菩薩になったと喜んでおったのも半年程で熱がさめたそうである。ピカッと光っても心がはっきりしないと駄目なんです。

善知識の言葉に従い明らかになるというのは、智慧の光に照らされるのである。道理もあろうし、感情もあろうし、訳もあるだろう。しかし感情や道理や訳で胸は中々明らかにならない、信の一念が大切なんです。「善知識の言葉に従い、帰命の一念発得すれば」と先徳は仰る。その善知識の教えによって如来の光明に照らされる。「一つには宿善、二つには善知識、三つには光明、四つには信心、五つには名号、この五重の義成就せずば、往生はかなうべからず」と蓮如上人の『御文』にある。善知識の教えというのも人の言葉です。丁度鏡や灯明によって姿がはっきりされるように、善知識の言葉の手だて（方便）によって胸が明らかになるのです。

「無礙の光明は無明の闇を破する慧日なり」。昨夜はこの無明の闇という事を話したが、その無明があらゆる苦しみの源をなす。世の中に苦しい事があるというのは、客観的の事象によるのではない、事象が苦しい事であるなら事象をいくら替えても又苦しい事象が出てくる。人間の苦しみは事象ではなくて、事象に対する自分の自覚、自分の無明で苦しまねばならぬ。だから苦しむ者は馬鹿だ、愚かだ。自分がはっきりわからぬから苦しまねばならぬ。苦しみのもとは皆無明である。苦しい自分をじっと考えると馬鹿だなあと気付く、暗い所に居るなあと気付く、この罰当り奴と気付く。私は始終自分にその事を思います。その暗い心は自分では晴れない、教えを受けねば晴れません。ここで善知識が大切なんです。親鸞聖人は法然上人に会うて初めて心が開けた。一旦心が開けたら善知識は要らんようになるかというとそうでない。常に聖人は御師匠をお慕いなされ、法然上人によって念仏せられた。自分の愚かさがわかり、自分の闇さがわかってくると一ツ時も明らかな光が離れられないなあと思う。だから苦しんでもすぐ飛び付く所がある。それはお念仏である、それによって心の闇が照らし出され、明らかな身になる。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

次に慧日、慧は智慧、日はお日様にお譬えになってある。我々の目に見える光で最も強い光は太陽である。聖人が自らを愚禿釈の親鸞と仰せられ、又悪業煩悩の塊だ、又、とても地獄は一定すみかぞかしと仰ったのも、それは智慧の光に照らし出されたお言葉である。我々は暗闇に居るという事に気が付いたら更に駄目を押さねばいかん。そして善とか悪とかを越えた真実に出会わねばならない。聖人は「顕浄土真実教行証文類」といって、「総序」の中では真宗ということは仰ってないが、「真」というのは一番の筋書である。とくに念を押して使われたお言葉は信心の信と真宗の真である。自然法爾の自の意味を味わえば、皆真である。真の光によって照らし出される時自分が本当にわかるのです。そして勇みが出るのです。自分が本当にわからんでおってやたらに竦んでみたり、跳ねてみたりする。憍慢と卑下とは同じことであります。

聖人は自分の信心のもとは如来の因位の本願、それが果上の光明となって現われて下さると仰る。その光明はどこに見られるか、善知識の言葉に見られる。光明は教えです。浄土真宗の教えは何かというと、本願と名号である。無礙光はその光明である。

我々が、自分を馬鹿な奴じゃと知らされるという事、苦しんでおる奴じゃという事を知らされるということは、本願に目覚めるということである。馬鹿な者とは、行くべき所に行かん人をいうのである。右と思っても右へ行けん、左と思っても左へ行けない、馬鹿の自覚の無い者には沈痛な懺悔の涙はない。地獄は一定すみかぞかしと仰るところに、真の懺悔がある。仏に成らねばおかぬという願いがはっきりするから仏になれるのです。助かりたいと願いつつ蓋をしている者がある。釜を下から燃せば釜から湯気が出るが、重い蓋をして湯気が出るのを圧えておる。この蓋が即ち疑いである。これがあるから、助かりたいという湯気も出られんのです。蓋が原因で湯気が出られないと気が付くと、ぱっと出られる。はっきりせんのはここに源がある。弘誓のお教えでこれがもとだとわかると、ぷっと出られる。そうすると本願がすっと成就する。「本願や名号、名号や本願」と仰せられる。それが光明摂取の内住まいということである。

（昭和七年一月十日・明達寺）

第七講

『教行信証』の最初のお言葉に就いて重ねて御教えを頂こうと思います。

「難思の弘誓は難度の海を度する大船」、阿弥陀如来の御本願を大きな船にお譬えになってある。「本願力に乗ずれば　報土にいたるとのべたまう」という御和讃を頂く時、やはりこの本願を乗物、船に見立ててお教え下さるのです。ところが或る場合には本願を海にお譬えになる。生死の苦海が海で、その海を渡って行く船が本願だというのが只今のお言葉ですが、又、大願海、大きな願いの海だと仰る。そうすると本願は船ではなくて、全てが本願である。本願は生死の海を渡す船だというてあるが、その本願が明らかに味わわれる時には、生死の海が無くなる。ただ本願のみになる。今晩はそこを味わってみたいと思います。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

生死の海というのは、我々凡夫の小さな心から、自力我慢の執心をもって苦しんでおる有様をさしていわれておるのです。それを生死の苦海という。その苦しみの中に息抜きをし、その苦しみの世界から逃れて楽しい浄土へまいる道、それを船に譬えて竜樹菩薩は、「水路の乗船は則ち楽しきが如し」と易行道を顕揚された。水道の乗船、船に乗って行く旅なのである。船に乗って行く時には又生死の苦海がある。もし船が転覆したら大騒動になるということがある。ところが生死の苦海の果てに涅槃がある。そこで生死の苦海から涅槃のあなたへ行く橋渡しの船だということになる。その味わいが段々成長してくると「生死即涅槃、煩悩即菩提」となる。この境地に入ると今度は生死の苦海が無くなってただ本願ばかりがあるのである。我々が腹を立てるとか、妬み、嫉みが起こるとかいろいろの煩悩が起こる、それらの煩悩は皆罪業、悪業である。それを逃れて煩悩の無い国へ行く、その時はやはり本願は船である。本願の船に乗り込んでみると煩悩は無くなる。従って悪業も無くなる。それはどういうことかというと、欲しい、憎い、可愛いという心もやはり起きる、が、欲しい心も、可愛い心も、憎い心も全てが本願の仕業である。本願があればこそ、可愛いとか憎いとかの心があるのです。所謂煩悩なるものは本願の相であります。可愛いさ余れば憎さ百倍という、憎いということは可愛いということの増つの現われである。無関係ということと違う。可愛いと憎いは一つである。欲しいということと要らないということと一つである。それはおかしいではないかと――。私共が助かりたい救われたいという燃え立つような願いがあるのに、他のものに妨げられて苦しい切ない心になる。苦しい心があってもその時それを撥ねのけて行くという力、そこに本願がある。苦しいから逃げるというのはまだ本当の苦しみでない、本当の苦しみがあればそれを解脱しようとする。自由になりたいという願いがあればこそ不自由なという苦しみがある。一緒になりたいという願いがあればこそ別れているという悩みがある。だから悩みは反対の証明になる。その事に悩むのはその反対の願いが現われておるからだ。寒いと苦しんでいるのは暖かくなって欲しいという願いの現われである。又は、暑いという感じが強ければ強い程涼しくなって欲しいという願いがはっきりしてくる。

阿弥陀さんの本願は煩悩悪業をひっくるめて皆乗せ給う。積み残すような小さな船でない。大願の船である、船それぐるみ阿弥陀さんの本願である。だから私ら生死の海にあぶあぶして溺れかかっていると思っておるが、そこに阿弥陀さんの本願がある。生死の苦海すっかり阿弥陀さんの本願である。だからどちらへ転んでも、どちらへ逃げてもお助けの外に出られんのです。逃げるなら逃げてみよである。逃げてもよけても廻り道してもちゃんと阿弥陀様は待っておいでになる。表は生死の苦海だが、阿弥陀様の本願の手が裏からちゃんと廻っておる。我々がお慈悲という事をはっきりする時もしない時も皆本願がある。そのままのお慈悲なのだ。だがこれはずるい心と違う。ここは危い所です。そういう言葉に溺れて、そういう事だと思っておると、それはとんでもない間違いです。自分自分の胸に、自分は今生死の苦海に溺れておるか、本願の船に乗っておるか、もう生死の苦海がなくなり、本願の中におるかと問うてみることです。本願の中におるということは、海に落ちるという気づかいがないことである。海の波は、

SAMPLE
Shoshin Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

そっくり自分を浮かばそうという波である。大海全体がこの人のためである。憂いも辛いも皆その人にとっての御催促である、寒いも暑いも苦しいも楽しいも全てが本願のお働きである。大願弘誓のお働きである。怪我をしたり、病気になったり、その他様々の苦しみ悩み、それらの悲劇は結局自分を気付かして下さるための善巧摂化の方便である。皆本願である。阿弥陀如来の本願は色々の方便をもって現われ給う。気に入らぬ人の言葉になって現われたりしてにじみ出て下さる。健康も御催促、病気も御催促、我々の一生は如来の願いの中の住まいである。だからこうなると、何処へ行っても助かる道ばかりで落ちる所はないのだ。苦しいからといって、喜ばれぬからといって、駄目だということはない、そこに誓願の働きがある。有難いと思う心の中に、物足らぬという心が起こる所に大願業力が働いて下さる。何処を見てもお慈悲、本願の力の溢れ出ておらぬ所はないのです。非常に広い味わいであります。こうなると仇はない、危い所もないのです。雨よ来たれ、風よ来たれ、天気よ来たれ、雷よ鳴れ、霰（あられ）よ降れ、さあ何でも受けるぞ、どんな難に会うても挫けない、そこには本願のお手強さが動いておいでになるという励みが起こります。弘誓の船は小さな船ではない。大願海は本願海である。

今から大分前面白い爺さんが居て、ここへも来たことがある。その爺さんがお慈悲を喜んだ時の話です。俺は今迄阿弥陀さんの本願は何処にあるかと思っておったが、実は本願は足の下にころころしておるのだったと言うておった。これは本当に味わった人の言葉であります。

本願は船だと思っておったが、海がそのまま船なのだ、海全体が船だからもう渡る必要はない。覆る心配もないのだ。船に就いての譬えがもう一歩進んだ時、本願がそのまま海であるとの味わいになる。聖人が自然法爾と仰る、又善もほしからず、悪も恐しからずと仰る、あののどかな、素直な心持は、本願海の広々とした心の世界をお味わいになったものである。何処にも彼処にもお助けの願いが燃え立っておる。我々の身体の内にも外にも何処を眺めても、弘誓の力が満ち満ちてあられる。だからお互いに助からずにおくわけにはいかんのです。助かって行くただそれ一つなのです。右へ転ぼうが左へ転ぼうが、一度本願のお手強さに目が覚めたらどのようにしてもただ助かるという道一筋がある。そこ迄行くと己は悪い者だという尻込みも要らない、善い者だという自慢も要らない、助かったと納まったり、駄目な者だと尻込みすることは要らない。俺は駄目だというのはまだ自力の根性である。そういう算盤勘定が出る間はまだ自力根性が砕かれておらんのです。何かを当てにしておるのです。地獄の底に堕ちてみれば、そこにちゃんと本願のお手強さが待っておって下さるのです。どこへも逃げる所がない、追いつめられて閉じこめられたそこには本願があるばかりです。

「願力無窮にましませば罪業深重もおもからず」、この三界のあらゆる苦悩を皆乗せても沈まない大きな大きな船、いやその苦悩の乗せ所もない程の大船である。なぜなら、その苦悩そのものが皆すっかり船であるからである。苦悩は大願業力の現われであ

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

る。だから乗って行く船賃も要らぬ、船も要らぬ。渡って行く所も要らぬのだ。すっかりこのままだ。この本願のお手強さに今も動かされておるのだ。それが本願海だ。本願の船が大願の海になる。

善導大師がこの本願のお味わいを二河白道のお譬えでお知らせになった。

一人の人あり、遥かの西に向うて進んで行こうとした。ところが忽然として中路に二つの河があった。南の方は火の河、北の方は水の河があり、その真中に幅四、五寸の白道があった。初めは百千里もある道と思ったが、今見る白道は幅四、五寸、長さ百歩。しかし、火の河からは焔が、水の河からは波浪がその道に覆いかぶさってくる。廻り道をしようとすると、水火の二河は長くて果てしない。向うへ行こうとすると、後方より群賊悪獣が出てその人を襲わんとする。前へ進まうとすれども、水や火のため道がわからなくなって行けぬ。立ち止まっておると、群賊悪獣に責め殺される。行こうとしても死ぬ、じっとしておっても死ぬ、抜けて出ても死ぬ、一つとして死を免れない。どうすればよいやらわからん。進退極まっておると、東の方から「汝その道を行け」、西から「汝一心正念にして直ちに来たれ、我れ能く汝を護らん」との声が聞こえる。これが有名な二河白道のお譬えであります。ただ真直ぐに行け、お前が思い立ったその道を来い、という発遣と招喚の勅命であります。

行者西に向うて行く、というのは、助かりたいということに気付いて、道を求める人のことである。幅四、五寸というのは衆生の四大、五陰に喩えてあり、火の河は瞋恚、水の河は貪欲、それが覆いかぶさって願いが消える。じっとしておれば群賊悪獣が来る、それはいろいろ娑婆にある煩悩が起こることを指す。行こうとすれば火に焼かれる、水に溺れる、じっとして居っても逃げても死ぬ。進退極まっておる時、真直ぐに進め、の声ありというのは、お釈迦様のお勧めの声、来たれ、というのは西方の阿弥陀如来の招喚のお声です。百歩の白道というのは、衆生が貪瞋の煩悩の中に在ってよく清浄願往生の心を起こすということであって、衆生がお浄土へまいりたいという願いが細々ながらある。その願いが白道なのです。ところがもう一歩深く見ると、その白道は、阿弥陀様の方からかかった白道である。行者の胸から向うへかかった白道でない。そして水火二河皆白道であり、四、五寸は算数の及ぶことのない無限に広い道となる。そうなるとこっちと向うの隔てがなくなる。娑婆と浄土の隔てがなくなる。煩悩即菩提、本願一実の大道、火の河水の河皆これ大道、それが大願海である。ここまで行くとどうなっておっても、助けにゃおかぬという大願業力が働いて下さる。本願とは小さな願いでない、大願業力だ、それを弘誓という。娑婆を見ても悲観しなくてよい。自分の内を見ても悲観しなくてよい、広大な道が開けておる。今迄人や自分を当てにしておった者はその当てが外れて苦しむ、その苦の中から立ち上って行くのです。外の人が褒めてくれるにつけても、謗るにつけても、又自分の力を見るにつけても、浅間しさを見るにつけても、さあこれからだぞと勇み立って行く。そこに、称名念仏勇みありという信心の味わいがあります。阿弥陀如来の本願を弘誓というのはこれであります。どうしても助けにゃおかんぞという、又助からにゃおれないという、これに答え給うのが弘誓

SAMPLE
Shoshin-Shisui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

である。だから「難思の弘誓は難度の海を度する大船」と仰ってある。この大船を渡すところの海、その海の彼方の浄土へ行く迄に貪瞋煩悩の火や水の河がある。そしてその中に四、五寸の白道がある。その白道を弥陀の招喚、釈迦の発遣により進むのです。

浄土も娑婆ももとは一つ、生死即涅槃です。行者の行く手には広々とした世界が開けている。その世界は、善も欲しからず、悪も恐しからぬ世界です。その世界に日暮しをさせて貰う、それがいわゆる温い摂取の光明の中の内住まいというお味わいなのであります。

（昭和七年一月十日・明達寺）

第八講

「窃に以みれば、難思の弘誓は難度の海を度する大船」、この第一句は阿弥陀如来の御本願の尊さを讃嘆され、「無礙の光明は無明の闇を破する慧日なり」は光明の尊さを讃嘆あそばされたのであります。この第一句の本願は『無量寿経』の上巻のおこころであるし、光明は下巻のおこころであります。第一句は因位のお徳、第二句は果上のお徳を讃嘆された。この二句は『仏説無量寿経』の上下二巻の大体を詰づめて讃嘆なされたものであります。

然れば則ち、浄邦縁熟して、調達闍世をして逆害を興ぜしめ、浄業機彰れて、釈迦牟提をして安養を選ばしめたまえり。斯れ乃ち、権化の仁、斉しく苦悩の群萌を救済し、世雄の悲、正しく逆・謗・闡提を恵まんと欲してなり。

これが『観経』のおこころを教えられた所であります。『無量寿経』では、法の真実を現わし、『観経』では機の真実を現わす、と常に聖人は教えて下さる。『大経』上下二巻には如来のお徳がこまごまと説き出されてある。その阿弥陀如来のお徳が実際この世の衆生に現われて御利益を蒙る相を述べられたのが『観経』である。『大経』と同じく『観経』も薬を飲んで病人が治るすがたを説き給うたのである。

「難思の弘誓は難度の海を度する大船、無礙の光明は無明の闇を破する慧日なり」、とこう仰ったその証拠は、「然れば則ち、浄邦縁熟して」云々の言葉に現わしてあります。『大経』下巻に聖行段というところがある。それはお浄土の菩薩の尊い日暮しがこまごま書いてある。それを頂いておると、自分の心や日暮しが照らされ、浄土の菩薩の日暮しが尊まれてくる。そして我々は駄目な奴じゃなあと自分の暗さを教えられるようになる。その暗さを説かれてあるのが三毒段、五悪段である。如来の光明に照らされて自分の胸の真暗闇がわかる。聖人は御自分の懺悔のお心持を『観経』の御教えの上に味わわれたのであります。

「然れば則ち、浄邦縁熟して、調達闍世をして逆害を興ぜしめ」、浄邦とは、浄土の縁が熟して、調達が闍世に逆害を興こさせた。調達とは提婆達多の事である。提婆達多とは、いつも話をするように、釈尊の弟子であり、従弟で、しばしばお釈迦様を殺そうとした人である。闍世とは阿闍世の事で、頻婆娑羅王と韋提希夫人との間に出来た王子である。逆害とは、逆は五逆罪、さかさま事

SAMPLE Shoshi-shinsui.com